

令和4年度 大学アスリートのスポーツ環境について

～江戸川大学の強化指定部を対象に～

桑川 岳勤*・青木 拓郎**

1. はじめに

2019年3月にUNIVAS(大学横断的かつ競技横断的統括組織)が設立された。UNIVASが設立された背景は、大学全入時代に伴い、今までとは異なる学力層の学生が大学に入学するようになったことが考えられる。スポーツ推薦等で大学の学力には及ばない状態で入学し、学業についていけない、スポーツばかり行い授業にほとんど参加せず単位取得が難しいなどの問題が山積みとなっていた。一方、NCAA(全米大学体育協会)は学業を疎かにすれば、練習や試合に出場できないなど文武両道を実現されたシステムが現在も維持されている。そこで、大学スポーツ界に存在する問題点を解決するため、学生アスリートの学業環境の充実を図るとともに、学業とスポーツの両立を目指し、大学スポーツの発展を実現することを目標として、UNIVASを立ち上げることになった。UNIVASの設立理念⁽¹⁾は、「大学スポーツの振興により、卓越性を有する人材を育成し大学ブランドの強化及び競技力向上を図る。もって、我が国の地域、経済、社会の更なる発展に貢献する」と定めている。

また、UNIVASの実現に向けて、大学スポー

ツの在り方を見つめ直し、大学におけるスポーツ教育やカリキュラムを充実させること、課外活動の運営・学業・キャリア形成などの支援を行うことにより、スポーツを取り組む学生へのより良い環境を提供することに着手している。そして組織的な整備と同時に、他大学、他競技間の選手とスタッフの交流する機会や講習会などの学習する機会を設けることにより、社会で活躍できる人材の育成にも取り組んでいる。文部科学省⁽³⁾は、このような取り組みを推進するために、大学スポーツの振興に向けた基本的な考え方を元に大学トップ層がスポーツの価値について認識を深めるような働きかけが重要となると示している。

西川ら⁽⁷⁾によれば、大学のスポーツ環境の問題は大学スポーツが教育機関であるという観点から、競技力向上のために今後のアスリートを取り巻くスポーツ環境の構築を目指した検討が必要である。大学のスポーツ環境には、部活動が活動していく中で様々な要因があり、多くの大学アスリートが恵まれた環境で活動できることを望んでいる。大学アスリートのスポーツ活動は、基本的には大学内のスポーツ施設で行われ、部活動によってスポーツ環境に違いはあるが、与えられた環境で競技力向上に励んでいる。それらのスポーツ環境の満足度を調査し、実態や改善策を明らかにすることは、今後の大学スポーツが発展するために必要なことである。

そこで、大学スポーツにおけるアスリートの実

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 男子バスケットボール部監督

** 江戸川大学 経営社会学科准教授 スポーツ科学

態を明らかにするために、本学を対象にして本研究を進めた。強化指定部という形でスポーツ強化に重点を置きながら、大学運営をしている点において現在求められている大学スポーツにおけるスポーツ環境、大学アスリートの実態を把握するには適切だと考えたためである。本学の強化指定部の設立に着目すると、男子フットボールクラブが1990年、男子バスケットボール部が2003年、女子バスケットボール部が2005年、女子バレーボール部が2013年に創部し活動をしている。2015年4月にアスリートセンターが設立され、男子フットボールクラブ、男子バスケットボール部、女子バスケットボール部、女子バレーボール部の4つの部活動が強化指定部として認められた。アスリートセンターの組織理念として、経営、教育、強化の三位一体を目標に取り組んでいる。また4つの強化指定部を、総合的に指導を行いクラブの総合力の向上と大学の発展を目指すとともに、近隣の学校をはじめ地域と連携してスポーツの普及や地域貢献を目的としている。東原ら⁽¹²⁾の報告と同様、クラブ活動を通してより豊かな人間性を備え、学業と競技を両立させることにより、一般学生の模範となる学生を育成すること、競技成績の向上をもって本学自体のブランド力を高めることを目標としている。

競技力の向上をもってブランド力を高めるという点においては、本学男子バスケットボール部OBのオリンピック出場が挙げられる。出場した

種目は新種目の「バスケットボール 3x3」⁽⁸⁾であり、カテゴリーとしてはアーバンスポーツとして分類される。2020東京オリンピックではアーバンスポーツ「都市型のスポーツ」⁽¹⁰⁾、つまり、これまでは「遊び」というカテゴリーで見られていたものが、人々にスポーツとして認められた。アーバンスポーツは、エクストリームスポーツという速さや高さを極限まで追求し、華麗な離れ業を競い合うなどの目まぐるしい展開が繰り返されるスポーツの一種である。東京大会でもアーバンスポーツの中から正式種目として種目が追加された。その新種目の中の「バスケットボール 3x3」において、本学の男子バスケットボール部OB 保岡龍斗選手が出場を果たした。オリンピック選手を輩出した本学として、第2の保岡選手が出るためにもスポーツ環境を整備し、大学スポーツの在り方などをさらに検討していく必要がある。部活動強化という視点で、オリンピック選手を輩出している大学が、スポーツ環境の学生満足度やニーズに言及している研究は少ない。

そこで、本学のスポーツ環境の実態と学生のニーズを明らかにすることは、大学に求められる学生支援のために重要であると考えられる。

2. 目的

本学の4つの強化指定部を対象に、スポーツ環境に対する満足度の実態とクラブ間の相違を明ら

表1 調査対象者の属性

強化指定部名	対象者数	回答数	回答率	2021主な成績	
女子バスケットボール	32	32	100%	関東2部リーグ	5位/8チーム
女子バレーボール	29	27	93%	関東2部リーグ	6位/8チーム
男子バスケットボール	77	69	90%	関東2部リーグ	5位/12チーム
男子フットボール	122	115	94%	千葉県1部リーグ	5位/5チーム
合計	260	243	93%		

かにすること、また、ニーズを明らかにすることを目的とした。

3. 方法

本学の4つの強化指定部の260名の部員にGoogle Formを用いたアンケート調査を行った(表1)。質問項目は、先行研究を参考に、満足度に対する全29項目(5段階尺度)、ニーズ調査に関する2項目(自由記述)とした。全体の満足度は、平均値と標準偏差で評価した。クラブ間の比較は、対応のない一元配置分散分析とTukey法による多重比較を行った。統計処理にはIBM SPSS Statistics 25を用い、有意水準は5%未満とした。ニーズ調査では、KH coderを用いて頻出語の抽出を行った。

4. 結果

満足度の総合的評価は、5点満点中 3.9 ± 0.9 点であった。満足度の評価が高かった区分(全て4.0点以上)は「施設」、評価が低かった区分(全て3.7点以下)は「練習時間」であった。

クラブ間の比較では、満足度の総合的評価得点および15項目の得点に有意差が認められた。また、満足度の総合評価得点は「練習内容」や「チーム内状況」の得点と関連が見られた。

ニーズ調査の自由記述において出現回数が多かった頻出語は、「栄養」と「練習」であった。

5. 考察

(1) 満足度の実態とクラブ間比較

本研究において、スポーツ環境に対する全体の満足度(全29項目および総合的評価)について、クラブ間の比較を行った結果、総合的評価の他に15項目において有意な差が認められた。それらの項目を区分すると、スポーツ施設、指導者、練習時間、練習内容、チーム、トレーニング、食事、コロナ、総合の9つに分類した(表2)。

全体の満足度を区別で見ると、「施設」

に関する満足度が高いことが示され、4つの強化指定部は充実した施設で活動を行っていることが推察できる。その中で、女子バレーボール部は競技に用いる用具とスポーツ施設の広さ(体育館、グラウンド等)の2つの項目に関して、他の部活動よりも満足度が低かった。女子バレーボール部は、4つの強化部指定部の中で唯一専用のスポーツ施設がなく、サークル活動と施設を共有しているため、練習時間の制限が多く、練習用具の準備や後片付け等にも時間を取られている。さらに、公式のバレーボールコートとして十分確保できていないことが満足度の低下に繋がっていると考えられ、西川ら⁽¹⁰⁾の報告と同様な見解を示した。

一方、満足度の低い区分は「練習時間」であった。練習時間の項目は、1週間あたりの練習日数、チーム練習の時間、自主練習の時間、練習の休日日数であった。各クラブの置かれているスポーツ環境を踏まえ、練習時間に関しての見直しや改善策の検討をする必要性が示された。また、伊藤ら⁽¹⁾の報告と同様に、練習時間については指導者と選手間でコミュニケーションを取り、コンセンサスを高めることで満足度の改善に繋がると考えられる。クラブ別では、男子バスケットボール部と男子フットボールクラブは、女子バスケットボール部と女子バレーボール部に比べると、部員数が多く、体育館、グラウンド、トレーニング場などを使用できる回数や時間が限られてしまうことも、満足度の低下に繋がっていると考えられる。

クラブ間比較において、4つの強化指定部の中で満足度が、最も高いクラブは女子バスケットボール部であり、最も低いクラブは男子フットボールクラブであった。特に総合評価の最も低い男子フットボールクラブでは、「練習内容」や「チーム内状況」の項目に差が見られた。クラブ間の差がある練習内容とチーム内状況に関する項目については、男子バスケットボール部、女子バスケットボール、女子バレーボール部は、練習内容を理解し日頃の練習に取り組んでいることや、チーム内状況における人間関係やリーダーシップなどが構築されており、選手間で良いコミュニケーションを取れていることが、競技成績に繋がって

表2 強化指定部の満足度

区分	項目	合計		1.女子バスケットボール部(n=32)		2.女子バレーボール部(n=27)		3.男子バスケットボール部(n=69)		4.男子フットボールクラブ(n=115)		平均値間の多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
施設	1)スポーツ施設設備(体育館、グラウンド、トレーニング場)	4.3	0.7	4.5	0.7	4.0	0.9	4.5	0.6	4.1	0.6	* 1>2,4 3>2,4
	2)競技に用いる用具	4.2	0.8	4.5	0.7	3.7	0.9	4.3	0.9	4.2	0.6	* 1>2 3>2 4>2
	3)トレーニング設備、器具	4.3	0.7	4.6	0.5	4.0	0.9	4.4	0.7	4.1	0.7	* 1>2,4 3>2,4
	4)スポーツ施設の広さ(体育館、グラウンド等)	4.3	0.8	4.5	0.7	3.6	1.0	4.4	0.8	4.3	0.6	* 1>2 3>2 4>2
	5)スポーツ施設の清潔さ	4.1	0.8	4.2	0.8	4.0	0.8	4.3	0.8	4.1	0.7	
指導者	6)指導スタッフとの関わり(監督・コーチなど)	3.8	0.9	4.1	0.8	3.7	0.9	3.9	1.0	3.7	0.9	
	7)指導スタッフの人数	4.2	0.7	4.1	0.8	4.0	0.6	4.3	0.8	4.1	0.7	
	8)指導スタッフの指導方法	3.6	1.0	4.1	0.7	3.3	0.9	3.9	0.9	3.4	1.0	* 1>2,4 3>2,4
練習時間	9)1週間あたりの練習日数	3.5	1.0	3.7	0.9	3.7	0.8	3.3	1.2	3.6	1.0	
	10)練習時間(チーム練習)	3.7	1.0	3.7	1.0	4.0	0.8	3.6	1.2	3.8	0.9	
	11)練習時間(自主練習)	3.6	1.0	4.1	0.7	4.2	0.7	3.4	1.2	3.4	1.0	* 1>3,4 2>3,4
	12)練習の休日日数	3.4	1.0	3.3	0.9	3.3	1.0	3.5	0.9	3.3	1.1	
練習内容	13)技術および体力向上のための練習メニュー	3.7	1.0	4.1	0.5	3.6	0.9	3.9	1.0	3.4	1.0	* 1>4 3>4
	14)チームワーク向上のための練習メニュー	3.8	0.9	4.2	0.6	3.9	0.7	4.0	0.9	3.6	0.9	* 1>4 3>4
	15)練習の運動量	3.9	0.9	4.0	1.0	3.9	1.0	3.9	1.0	3.8	0.9	
	16)練習時の緊張感	3.8	0.9	4.0	0.8	3.5	0.8	3.9	0.8	3.6	1.0	
	17)チーム内の紅白戦の頻度	3.6	0.9	4.1	0.5	3.8	0.9	3.3	1.1	3.7	0.9	* 1>3
チーム	18)チーム内の昇格、降格(Aチーム、Bチーム、Cチームなど)	3.5	1.0	3.8	0.8	3.6	1.0	3.7	1.0	3.3	1.0	
	19)主将や副将や上級生のリーダーシップ	4.0	0.9	4.4	0.7	4.3	0.7	4.3	0.8	3.7	0.8	* 1>4 2>4 3>4
	20)現時点での部員の数	3.9	0.9	4.3	0.7	4.3	0.7	3.8	0.9	3.7	0.9	* 1>3,4 2>4
	21)部内のコミュニケーション(同期、先輩、後輩)	4.1	0.8	4.4	0.6	4.4	0.7	4.1	0.8	4.0	0.8	* 1>4 2>4
トレーニング	22)部費の金額(年間・月謝)	3.8	0.9	3.5	1.0	4.0	0.8	3.6	0.9	3.9	0.9	
	23)レジスタンス(ウエイト・ラン・アジティ等)トレーニングの内容	3.8	1.0	4.1	0.9	3.9	0.8	3.9	1.0	3.5	1.0	* 1>4,3>4
	24)レジスタンストレーニング頻度	3.7	1.0	4.1	0.6	3.9	1.0	3.8	0.9	3.5	1.0	* 1>4
食事	25)栄養講習会の頻度(週間・月間・年間)	3.7	0.9	3.9	0.7	3.9	0.8	3.6	0.9	3.6	0.9	
	26)朝食摂取状況	4.1	0.9	4.4	0.6	4.0	0.9	4.1	0.9	4.0	0.9	
	27)昼食摂取状況	4.2	0.7	4.4	0.6	4.3	0.7	4.4	0.7	4.1	0.8	* 3>4
	28)夕食摂取状況	4.3	0.7	4.4	0.5	4.3	0.7	4.4	0.7	4.3	0.7	
コロナ	29)コロナに關しての感染対策	3.9	1.0	4.1	0.7	3.6	0.9	4.1	0.9	3.8	1.1	
総合	30)総合的評価	3.9	0.9	4.1	0.7	3.9	0.8	3.9	0.9	3.8	0.9	* 1>4

注1) M:平均値 SD:標準偏差 * :P<0.05

注2)平均値は5段階の得点で求めた。

いる要因だと考えられ、外山ら⁽¹³⁾と同様の見解を示した。一方、男子フットボールクラブは練習内容について選手と指導者が共通理解を深め、競技力向上を図るための練習やトレーニングを行うことが重要である。また、チーム内状況における人間関係の構築やリーダーシップ、コミュニケーションを積極的に行い、練習や試合を取り組む必要がある。島本ら⁽⁹⁾によれば、目的や目標に向かって挑み続けるアスリートは、経験を通じてライフスキルを効果的に獲得することができる環境にあると報告している。

本研究の結果から、スポーツにおける満足度を得るためには、他者との関係性を重要視する必要がある。そのため、コミュニケーションの必要性は、深見ら⁽²⁾の報告同様、チーム力向上および競

技力を高める重要な要因と捉えられ、スポーツ環境を構築していく必要があると考えられる。

また、西川ら⁽⁷⁾は、集団競技と個人競技、体育系サークル群と運動部群との比較を行っている。本研究では、本学の4つ強化部指定部を対象にクラブ間の比較を行っており、比較する対象群に相違があるため直接的に先行研究と比較検討を行うことはできないが、スポーツ施設、競技に用いる用具やトレーニング設備、器具、指導者、練習時間、練習やトレーニング、食事のサポート、チームの部員数、チーム内における人間関係、コミュニケーションなど、満足度に差が見られる内容は、西川ら⁽⁷⁾と同様な傾向が見られた。

そして、本研究では、全体の満足度の区分において「施設」に関する満足度が高く、「練習時間」

に関する満足度が低いことが示された。つまり、「ハード面」よりも「ソフト面」に課題があることが推察された。またクラブ間の比較では、総合的評価にクラブ間の差が認められ、「練習内容」や「チーム内状況」への評価の差と関連する可能性が推察された。このことは、大学に求められる学生支援の新たな知見になり得ると考えられる。

以上のように、大学アスリートにおいてスポーツ環境を取り巻く様々な要因が存在し、スポーツの満足度に大きく影響していることが示唆された。今後は大学アスリートを取り巻くスポーツ環境の構築を目指した検討が必要と考えられる。

(2) 部員のニーズ

元嶋ら⁽⁴⁾は、コンディショニングや身体的トレーニングのニーズが多く見られたことを報告している。本学の強化指定部のニーズ調査の結果、競技力向上のために受けたい講習会や知りたい情報として、栄養についての情報を求めていることが示された。大学生アスリートとして競技力向上のために自分自身の体を知り、強靱な体を作り上げることは非常に重要であると考えられる。これまでの研究において、大学スポーツ選手の私生活に影響を及ぼす要因と食生活の実態などが報告されている⁽⁵⁾⁽⁶⁾。また、実家暮らしの学生は家族のサポートを受けられるが、1人暮らしや寮生活の学生は自分自身で食事や栄養の管理をしなければいけない。大学生アスリートは、身体活動量が激しく多くのエネルギーや栄養素が必要となると、認定NPO法人フードバンク山梨⁽⁶⁾も報告している。

また、全体の満足度において、食事摂取状況は満足度が高く、栄養講習会の頻度については低かったことから、「栄養」に関する専門的な教育を求めていることが示された。栄養士を招いた講習会などを受けることで、大学アスリート自身が栄養に関する知識を得ることができる。そして、大学アスリートとして適切な食生活に繋がる。大学のスポーツ環境を整える上で、大学生アスリートの食生活に関する支援が必要であると考えられる(表3)。

表3 競技力向上のために必要な情報
(頻出語上位5項目)

頻出語	出現回数	具体例
特になし	58	
栄養	44	栄養指導・プロテインなどの栄養
メンタル	27	メンタルトレーニング・スポーツメンタル
講習会	22	技術講習会・戦術講習会
トレーニング	18	筋力トレーニング・トレーニング方法

表4 競技力向上のための大学への要望
(頻出語上位5項目)

頻出語	出現回数	具体例
特になし	75	
練習	56	練習回数・練習時間
トレーニング	11	トレーニング施設・トレーニング器具
自主	10	自主練習の確保・自主練習スペース
チーム	9	チームワーク・チーム内競争

次に、競技力向上のために大学に望むこととして、「練習」について求めていることが示された。時間、トレーニング、自主など、練習内容に繋がる回答も少なくはなかった。コロナ禍の影響は本研究では言及できないが、スポーツの活動自粛など、コロナ禍は大学生生活に大きな変化をもたらしていると考えられる。また、今まで当たり前のように行えた練習や練習試合などは、様々な制限がある中で活動再開となってきたが、神田ら⁽²⁾の報告のように、コンディションやモチベーションの維持が非常に難しいと考えられている。コロナ禍の困難な状況下のみならず、大学生アスリートの在り方や大学スポーツの価値を見つめ直し、選手同士で課題や悩みを共有し、解決に向けた場を生み出していく必要があると考えられる。つまり、指導者と選手間で、「練習内容」や「練習時間」に関するコンセンサスを高めることが重要であると考えられ、伊藤ら⁽¹⁾の先行研究を支持するものであった(表4)。

6. 結論

本研究において、本学の4つの強化指定部のスポーツ環境に対する実態調査を行い、以下のことが明らかとなった。

- 1) 全体では、「施設」に関する満足度が高く、

「練習時間」の満足度が低かった。

2) 満足度の総合的評価についてクラブ間の差が認められ、「練習内容」や「チーム内状況」に関する項目への満足度と関連することが推測された。

3) 大学に対するニーズ調査では、「栄養」に関する講習会の開催や「練習時間」等の見直しに関する要望が示された。

7. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界としては、本学の強化指定部のみを対象としたこと、また、クラブ間のみと比較であったことが挙げられる。

具体的には、競技力向上を目指している他大学の調査も必要であることは言うまでもない。また、各クラブの学年別の比較やコロナ禍における活動についての調査を行っていない。学年の属性による調査を実施することは、学年による相違を把握することが可能となり、大学アスリートの実態をさらに掘り下げることができると考えられる。

本研究で明らかになった学生のニーズについては、強化指定部の指導者やスタッフへフィードバックを行い、競技力向上に繋がる支援策の一助として活用できると考えられる。また、外部の専門家、プロ選手、指導者を招いて講演会や現場指導などを開催し、学生のニーズがどのように改善されたかを調査することで、大学アスリートの満足度を高める効果的な取り組みを評価できると考えられる。継続的な調査の実施については、今後の課題としたい。

引用文献

- (1) 伊藤豊彦, 遠藤俊郎 (1993) コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係. 鳥根大学教育学部紀要, 教育科学, 27, 37-44.
- (2) 神田れいみ, 佐野毅彦 (2021) 新型コロナウイルス感染症感染拡大に起因するリーグ戦休止・中止がプロバスケットボール選手に与えた影響に関する研究. スポーツ産業学研究, 31 (3), 307-316.
- (3) 文部科学省 (2017) 大学スポーツの振興に関する検討会議, 最終とりまとめ, 大学のスポーツの価値の向上に向けて. 文部科学省. (https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf アクセス日 2021年10月1日)
- (4) 元嶋菜美香, 宮本彩, 神野周太郎, 宮良俊行, 宮原恵子, 熊谷賢哉 (2021) 長崎国際大学スポーツ系部活動・サークルに所属する学生の現状とニーズの研究. 長崎国際大学論叢, 3, 41-56.
- (5) 中村文香, 七尾由美子, 春名亮, 桜田惣太郎 (2018) 大学スポーツ選手の食行動変容ステージに影響を及ぼす要因と食生活の実態. 日本食育学会誌, 12 (2), 125-134.
- (6) 認定NPO法人フートバンク山梨 (2020) コロナ禍の影響を受けた大学生に対するアンケート調査報告書. 認定NPO法人フートバンク山梨, 1-22.
- (7) 西川大輔, 小山貴之, 松本恵, 竹俣壽郎, 野口智博, 高橋正則, 佐久間智央, 小岩瑠 (2014) 大学スポーツ・アスリートにおけるスポーツ環境に対する満足度について. 日本大学文理学部人文科学研究部研究紀要, (88), 107-118.
- (8) 岡田忠, 飯尾淳, 中祖嘉人 (2018) 3x3 競技におけるおプロバスケットボールクラブのシステムの提案. 信学技報, 5, 9-13.
- (9) 島本好平, 東海林祐子, 村上貴聡, 石井源信 (2012) アスリートに求められるライフスキルの評価. 大学生アスリートを対象とした尺度開発スポーツ心理学研究, 40 (1), 13-30.
- (10) スポーツ庁アーバンスポーツツーリズム研究会 (2021) アーバンスポーツツーリズム推進に向けた論点整理. 文部科学省. (https://www.mext.go.jp/sports/content/20210407-spt_stiiki-000014050_1.pdf アクセス日 2021年10月1日)
- (11) スポーツ庁 (2018) 一般社団法人大学スポーツ協会 (UNIVAS) について. 大学スポーツ協会設立準備委員会事務局, 1-31. (https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1410363_005.pdf アクセス日 2021年10月1日)
- (12) 東原文郎, 澤井和彦, 中村祐介, 横田匡俊, 舟橋弘見, 長倉富貴, 石川勝彦, 村島夏美 (2019) 学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景. スポーツ産業学研究, 29 (4), 281-291.
- (13) 外山美樹, 湯立 (2019) 大学運動部活動における部員の自律的動機づけが部活動への適応感に及ぼす影響, 主将のリーダーシップを調整変数として. 教育心理学研究, 67 (3), 175-189.